

月刊

# みんぱく

● 国立民族学博物館

2009

9

月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283  
平成21年9月1日発行 第33巻第9号通巻第384号

特集 ● 特別展

「自然のこえ  
命のかたち」



SC

# 「間」を聴く設え

しょうのたいこ  
庄野 泰子



ま・ここへに在る音に立ち  
会い、その音があるがまま  
に受け入れて聴くための作

品——「偶然性の音楽」を作曲したジョン・ケージは、禅の思想に深く影響を受けていた。彼の代表作である『四分三三秒』（一九五二年）では、演奏者は四分三三秒間ステージ上で何も演奏せず、聴衆はその時その場に偶然生じた音と出会う……音との「一期一会」である。この作品は、音楽以外の多くの分野にも影響を与えたが、この曲が三つの部分に分かれていることは、意外に知られていない。しかし実は、この事がとても意義深いのである。各部分の区切り方は、演奏家に委ねられているのだが、初演のデビッド・テュードアはピアノの蓋の開閉によって、それを表した。現在出版されている楽譜では、一枚の縦長の白い紙に、「第一部」

「休み」「第二部」「休み」「第三部」「休み」と上から順に文字が記されている。通常、西洋音楽の楽譜は、時間の進行を横軸に、音の重なりを縦軸にとるようになっており、この作品も初演の楽譜は横方向へ進行するよう書かれていた。後にそれが改訂され、上から下へと縦方向に進行するよう記されているのは、単に時間が時計のように流れるだけでなく、そこにある深さを表現しているようにも思われる。

このように分節化された『四分三三秒』に、日本庭園における「鹿おどし」と共通する思想を汲み取ることはできないだろうか。「鹿おどし」は、もともと鳥や獣を追い払う農耕機具であったが、それを石川丈山が終の棲家とした京都「詩仙堂」の庭に設置したのが、庭園における「鹿おどし」の始まりと言われている。

そして、それが農耕機具から音響装置へと転換した時、その音のポジとネガは反転したのではないだろうか。竹筒が石を打つ音が聴くべき音ではなく、その音と音との「間」こそが、つまり、もともとその場にある樹々のざわめき、風やせせらぎの音こそが、聴かれるための音として浮上する。漫然と過ぎてゆく時間の流れが、「鹿おどし」の音で分節化されることによって、その「間」が生き生きとした音風景として、鮮やかに立ち現れるのである。

そして、この「詩仙堂」が禅寺であることを思い起こす時、『四分三三秒』を分節化したジョン・ケージの思想と、「鹿おどし」を庭に設置した石川丈山の思い——この両者に通底する、「間」を聴く設えというものを、私は感じずにはいられないのである。

- 1 エッセイ 世界へ●世界から  
「間」を聴く設え  
庄野 泰子
- 2 特集 特別展  
**自然のこえ 命のかたち**  
——カナダ先住民の生みだす美  
…… 岸上 伸啓  
「カナダ文明博物館」の逸品を愛でる機会  
…… 岸上 伸啓  
イヌイットの眼と心が描きだす版画  
…… 小林 正佳  
変身の哲学 イヌイットと北西海岸先住民の美術からの問い  
…… 大村 敬一  
版画に登場する個性的な生き物たち…… 齋藤 玲子  
デジタルとアニメの楽しい仕掛け…… 伊藤 敦規  
先住民の暮らしを学ぶワークショップ…… 田主 誠

- 8 モノグラフ  
**点字の宇宙**  
企画展「…点天展…」の趣旨  
廣瀬 浩二郎

- 10 地球ミュージアム紀行  
**スペインのハムの博物館**  
ブタを支える地域まるごとミュージアム  
野林 厚志

- 11 表紙モノ語り  
**イヌイットの版画「夏のふくろう」**  
岸上 伸啓

- 12 **みんぱくインフォメーション**

- 14 人生は決まり文句で  
**「神の御心のままに」**  
岡田 千歳

- 15 万国津々浦々  
**都会の選挙と田舎の選挙**  
変容するケニアの遊牧民集落  
内藤 直樹

- 16 多文化をささえる人びと  
**外国人の「居場所」をつくる**  
財団法人 とよなか国際交流協会  
野中 モニカ

- 18 生きもの博物誌  
**世界を動かした熱帯の植物「コショウ」**  
金子 正徳

- 20 歳時世相編  
**ホーおじさんの九月二日**  
ベトナムの国慶節  
樫永 真佐夫

- 22 フィールドで考える  
**ブタ**  
バブアニューギニアの呪術とモノが宿す力  
小坂 恵敬

- 24 **みんぱくウィークエンド・サロン**  
研究者と話そう  
次号予告・編集後記

東京学芸大学大学院（音楽学）修了。音環境の調査・研究を経て音環境デザイナーとなる。また音と呼吸する光のデザインも手掛ける。福島県いわき市の小名浜港2号埠頭再開発事業、新潟県長岡市の国営越後丘陵公園など。ar + d Award最優秀賞など海外の賞をはじめ、日本建築美術工芸協会AACAA賞大賞など受賞多数。『環境デザインの試行』など音環境に関する執筆・翻訳・講演の他、音のワークショップも行う。武蔵野大学環境学部講師。





ビーズで飾られたイヌイトの女性用上衣 (カナダ文明博物館資料)

イヌイトのアザラシ皮製の浮き (カナダ文明博物館資料)



五大湖周辺地域の先住民のカメを彫ったお守りもしくは小像 (カナダ文明博物館資料)

イヌイトのセイウチ牙製の雪めがね (カナダ文明博物館資料)



平原地域の先住民の子ども用モカシン (カナダ文明博物館資料)



五大湖周辺地域の先住民イロコイのパイプ、500-600年前のもの (カナダ文明博物館資料)

特集  
● 特別展

# 命のかたち

## カナダ先住民の 生みだす美

カナダにはさまざまな先住民がいる。彼らの人や自然への思いが、モノのなかに文様や図像をとおして描き出されている。九月一〇日から十二月八日まで開催する特別展では、儀礼の道具や生活用具、衣類、アート作品によってカナダ先住民の多様で豊かな文化を紹介する。

岸上伸啓

民博 先端人類科学研究部

カナダ・イヌイトを中心に北方先住民文化の研究をはじめ二五年。現在は、アラスカのイヌピアツクの捕鯨文化を研究中。著書に『イヌイト』(中公新書) などがある。

カナダは、雄大な自然が残る美しい国である。現在、総人口が三二〇万あまりのカナダには約一七万人の先住民が住んでおり、彼らの存在は多様で異質な文化によって構成されるカナダ国にひと

きわ目立つ彩を添えている。

今回の特別展では、カナダ先住民の多様で豊かな文化を、地域や歴史をふまえて紹介することを目的としている。さらに、私たちは、先住民がいかに自然とかわりながら、人生を謳歌(うたが)してきたかについて、彼らが作りだしてきたモノやアートを通して表現したいと考えている。

特別展は、大別すれば二つの展示から構成されている。一階展示場は、カナダ文明博物館の国際巡回展「カナダの先住民文化」の展示で、歴史的に形成されてきた多様なカナダ先住民の文化を概観することで、その全体像を紹介する。二階展示場では、イヌイトと北西海岸先住民に焦点を絞り、かれらが制作したユニークな版画を中心に民博の資料を展示し、自然と一体化する先住民の世界観を紹介する。

また、写真やビデオを用いてイヌイトと北西海岸先住民の自然環境および社会を紹介したり、動物から人間への「変身」やワタリガラスの神話は最新のCG技術を駆使してアニメーションでご覧いただくなどの趣向を凝らしている。さらに、ワークショップでは、モノづくりも予定している。

本展示は、五感をとおしてカナダ先住民の文化にふれる楽しい展示となっている。一人でも多くの方に、展示を体験してもらいたいと願うしだいである。



北西海岸先住民の額飾り (カナダ文明博物館資料)

トーテムポールの建立 (撮影・岸上伸啓、2006年)



家紋が施されたハイダのマント オールド・マセット (撮影・岸上伸啓、2006年)

北西海岸先住民のワタリガラスが彫り込まれたシロイワギの角製のスプーン (カナダ文明博物館資料)



北西海岸先住民の木箱 (カナダ文明博物館資料)







カナダ文明博物館の展示館の全容 (撮影・岸上伸啓)

## 「カナダ文明博物館」の逸品を愛でる機会

### 岸上伸啓

オタワの国会議事堂からオタワ川を隔てた向こう岸を見ると、奇妙な姿の建物が立っている。それが、オタワの観光名所のひとつであり、年間一三〇万人近い来館者数を誇るカナダ文明博物館である。同館の出発は一五〇年ほど前にさかのぼる。これまでカナダ全土の先住民に関する資料を収集しており、カナダ先住民資料の世界最大の宝庫である。

今回の特別展では、カナダ文明博物館の国際巡回展「カナダの先住民文化——カナダ文明博物館の逸品」を受け入れることになった。この巡回展は、カナダ文明博物館が誇る先住民資料のなかから選抜された「家宝」といえる資料約

二〇〇点で構成されている。この展示の特徴は、広大なカナダにおける歴史的にも地理的にも多様な先住民文化を概観することを可能にしている点である。

展示は、カナダ先住民の文化を文化と生態系によって四つのコーナーに分け、それぞれ代表的な資料を展示している。

第一のコーナーは平原地域で、バインソン猟や馬の利用によって開花した平原地域の先住民の文化が、衣服やモカシン（革靴）などのビーズワークを中心に展示されている。

第二のコーナーは五大湖を中心とした東部森林地域で、農耕民の世界が、土器やパイプなどを中心に展示されている。

第三のコーナーは、亜極北地域および極北地域の厳しい環境に住む先住民の世界がテーマであり、狩猟道具や毛皮製の衣類などが展示されている。

最後の第四のコーナーは、海陸の資源にめぐまれた北西海岸地域で、精巧に作りあげられた仮面や木箱などが展示されている。

この展示をみれば、カナダ内の異なる環境においていかにユニークで多様な文化が形成されてきたのか、それらが交易やヨーロッパ人との接触によってどのように変容していったのかを知ることができる。

このような展示は、日本では数十年に一度の機会になる可能性が高い。一点ずつじっくりと見て、カナダ先住民の文化のすばらしさとユニークさを心ゆくまで味わっていただきたい。



ケーブ・ドーセットの工房でリトグラフを制作中 (撮影・ノーマン・ボラノ、2009年3月26日)

## イヌイットの眼と心が描きだす版画

小林 正佳  
こばやし まさよし

天理大学総合教育センター教授、民博 共同研究員  
専門は宗教学、舞踊論。民俗の世界に根をもつ創造的営みに関心をもっている。著書に『踊りと身体の回路』、『舞踊論の視角』、訳書に『北極で暮らした日々』（ヒューストン）など。

アメリカのどこかの美術館で初めて目にするまで、「イヌイットの版画」など聞いたこともなかった。木もない北極圏で版画なんて、と思ったのと、いかにも日本風な落款が印象的だった。以来わたしは、イヌイットの版画に惹かれてきた。

その後、イヌイットに版画技法を伝えたジェームズ・ヒューストンの自伝を翻訳するなどして、民俗の世界から新しい美術が生み出される経緯そのものに興味をもつようになった。

二〇代の若者と、隔絶して暮らす人びとの出会い。歴史の転換点とはいってもこんなものなのかもしれない。偶然を偶然の不思議に変えてゆく意志。突発を受け入れる勇氣。

とくにわたしは、広く流布した出発点の物語が好きだ。  
ある晩、猟師のオシユイトウツクがタバコの箱に描かれた同じ二つの顔を眺めていた。全部の箱に同じ顔を描いていくなんて、恐ろしく退屈な仕事に違いない！  
ヒューストンは、知っている限りの言葉を動員し、版画の仕組みを説明する。実際にやって

見せられる材料はないものか。辺りを見まわすと、セイウチの牙の彫り物が眼にとまった。インクに指を浸し、牙に塗り、ティッシュペーパーを被せて上から軽く擦る。それから、素早くそれをはぎ取ると、牙に彫り込まれた絵柄の逆さの画像が写っていた。

「これなら俺にもできる」。猟師特有の素早い判断でオシユイトウツクが言い、こうして版画作りが開始される。

いかにも記述は簡潔だし、語られる出来事もじつにあつさり展開する。それだけにこの物語には、聞く者を容易に納得させてしまふ、神話の力が具わっている。

確かに、イヌイットの版画を通常の意味での伝統とよぶことはできない。しかしなお、わたしたちが感銘を覚えるのは、自分たちとは違う独自の眼が捉え、独自の心が描いた世界がそこにはあるからだ。しかも、巧みな構図、豊かな色、時には鋭く時にはおらかな線。そうした表現を、石を彫り、細かな道具を作り続けてきた確かな腕前が支えている。

しつかり身についた、長い時間のなかで練り上げられたものだけが生み出す確固たる存在感。その点が貴重だと思ふ。

## 変身の哲学 イヌイットと北西海岸先住民の美術からの問い

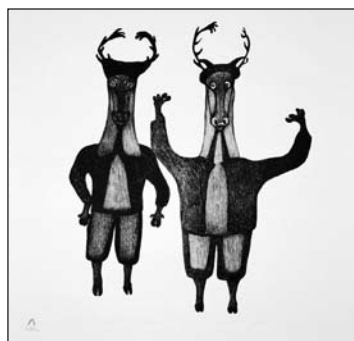
おおむら けいいち  
大村 敬一

大阪大学大学院言語文化研究科准教授、民博 共同研究員  
カナダ極北圏の先住民、イヌイットについて研究している。

今や、私たち日本人にとって、変身は珍しいことではない。アニメーションの力もあって魚から人間への変身、人間からさまざまな動物や超自然的存在への変身、変身する神々、巨大ロボットの变身など、変身は陳腐ですらある。

イヌイットと北西海岸先住民の美術を見ると、こうした変身には、人類を共通に惹きつける何かがあるような気がしてくる。私たちとは環境も歴史も異なる彼らの美術にも、人間から動物へ、動物から人間への変身、奇妙にねじ曲げられ、さまざまに変形した動物の姿が、溢れんばかりに描かれているからだ。

北西海岸先住民の美術の場合、動物は社会集団の神話的な歴史と権威を示す象徴であり、その動物の姿が、家屋や箱、道具や衣装、トーテムポールにびたりと一致するように描かれる。



「人間のように振る舞うカリブー」オシヨーン・アク・ブッラット、1983年制作

れる。しかも、それらがその動物そのものになるように、分解されて変形される。そうすることで、単なる物質である生活用品に、社会集団を神話的に象徴する動物のかたちを与えて生命を吹き込み、日常生活の場と神話の場を融合するのである。

一方で、イヌイットの美術の場合には、変身は世界の秩序と関わっている。人間は人間として振る舞うから動物であり、動物は動物として振る舞いの方によって、人間は動物にもなってしまうし、動物は人間にもなってしまう。世界の秩序は、それぞれの人間や動物の適切な振る舞いしだいであり、それぞれが適切に振る舞い損ねれば、脆くも崩れ去ってしまうだろう。

しかし、これを逆に言えば、どんなに今は醜く悪しき世界であっても、適切に振る舞うことによって、美しく善き世界が実現される可能性があるということにもなる。イヌイットの美術の変身には、世界の秩序の脆さへの不安とともに、その脆さ故に開かれる希望が込められているのである。

それでは、私たちの場合には、変身とは何だろうか。イヌイットと北西海岸先住民の美術は、そう私たちに問い返してこないだろうか。



「ワタリガラスの家」ロイ・ピッカーズ、1976年制作



# 版画に登場する 個性的な生き物たち

さいとう れいこ  
齋藤玲子

北海道立北方民族博物館主任学芸員 民博 共同研究員

アイヌと北西海岸先住民をはじめ北方の先住民文化を研究。工芸品や観光など、外部との接点に関心がある。

九月の北海道といえば、サケ。これが活字になるころ、筆者の住む網走でも秋サケ漁が最盛期を迎えているだろう。北太平洋沿岸のくらしを支えてきたのはサケである、と言っている。

北海道のアイヌと北アメリカの北西海岸先住民は、距離的にずいぶん離れていると思われる方もあるかもしれないが、じつは共通点が多い。サケ漁を中心とする生業のサイクルや、豊富な木材を利用した住居、船、衣類、容器といった物質文化、狩猟や漁撈を支配する「海の主」や「山（森）の主」として畏れ敬われるシャチやクマの神話にいたるまで、多々挙げることができる。蛇足ながら、現代の日本では、水産、林産品の多くをカナダやアラスカから輸入している。この地域の海や山の資源と私たちの生活とは深く関わっている。



「ハイダのシロザケ」ビル・リード、1974年制作

# デジタルとアニメの 楽しい仕掛け

いとう あつり  
伊藤敦規

民博 外来研究員（日本学術振興会 特別研究員 P D）、民博 共同研究員

専門は社会人類学。米国南西部先住民が制作するモノ（アート商品・博物館資料）と情報・知識の管理（先住民の知的財産問題）の相関性に研究している。

今回の特別展の隠れたテーマに「驚き」と「楽しみ」がある。それらが意味するのは、カナダ文明博物館が貸し出す一級品のカナダ先住民資料を間近で見られること、そして、民博が収蔵するイヌイットと北西海岸先住民が制作した版画が100枚近く一堂に展示されるといって、極めて稀な機会に巡り会えることである。日本にいながらにして、カナダ先住民が織りなすアート世界の一端にふれられるという、いわば、高校生以上の「大人」向けの「驚き」と「楽しみ」といえる。

同時に、小学生や中学生といった「子ども」たちにも共有してもらえよう。五感にうったえかける「驚き」と「楽しみ」も用意している。たとえば、正面奥の二階へと上る階段の踊り場では、最新のCG技術を駆使したアニメーションを連続放映する予定である。内容は、極

北のイヌイットの動物観（人間への変身）や、北西海岸のトームポール等に描かれる分割画法の映像による解説である。

版画とモノの世界が開示されている二階では、たとえばシャチといった動物の名前が画題に付いている均整のとれた幾何学模様の版画作品を目にするだろう。ただ、そのモチーフがシャチなのかは一般の人びとにはわかりづらい。

アニメーションは、タイトルの動物名と完成作品の関連性、北の大地に暮らす動物たちに対する文化的な捉え方を、親しみやすい映像を通してわかりやすく解説する、いわば予習用の参考書となる。

その他にも、二階の階段近くには、アニメーションと同様に特別展開連事業として日本の大学機関等が特別に製作した、体験型のデジタルコンテンツも設置する予定である。巨大なテレビ画面を介して動物に変身することができる「くまさんになろう」や、「飛び出す絵本」といったアトラクションである。



イヌイットの動物観（変身）のアニメ「ホッキョクグマの本当の姿」より CG画像提供：大阪電気通信大学デジタルアート・アニメーション学科上田研究室（立体アニメーション研究室）

「大人」が充分に驚けるカナダ先住民アートの多様な個性や個性の作品の存在を、子どもたちも一緒に楽しめるいくつかの仕掛けとともにご覧いただきたい。

# 先住民の暮らしを学ぶ ワークショップ

たぬし まこと  
田主誠

版画家、民博 共同研究員

文化庁の学校への芸術者派遣による美術指導や全国のミュージアムでワークショップの講師を務める。

民博が開館した一九七七年に、私はカナダ州立オンタリオ博物館のキュレーター課程修了者から同博物館のワークショップ活動を知ることができた。利用者が博物館で楽しく学ぶためのテキストやワークシートの数々は美しく、わかりやすく、胸を躍らせるものであった。

あれからわが国では至るところにミュージアムが設立され、今ではどのミュージアムでもワークショップが試みられている。そもそも「ワークショップ」とは、「共同で何かを作り上げる場所」である。その魅力は、子どもも大人も参加者が助け合いながら場所と時間を共有し、完成に向けてモノを作りあげることである。



ワークショップ「北西海岸先住民の箱づくり」制作見本（10/25 開催）



ワークショップ「ヤマアサシの針のアクセサリー（クイル）づくり」制作見本（11/15 開催）

民博のワークショップでは、とくに生活に使用されたモノの本質を見極め、民族固有の文化を理解することが目標である。参加者ははさみやカッターナイフなどを駆使し、接着剤、絵の具を使用して「切る」「貼る」「組み立てる」「塗る」の作業を経てオリジナル作品を完成させることができる。

本特別展のワークショップは、参加者がカナダ先住民の暮らしの一端を楽しく学ぶために組まれている。展示されている北西海岸先住民の標本資料やシルクスクリーン版画作品からは動物、人間の精錬されたフォルムやデザインを、イヌイットの版画作品からは自然とともに生きる動物や人間の姿に注視し、作品づくりに取り入れて欲しい。

ワークショップのもうひとつ大切なことは、作品完成後はみんなで品評会をおこない、作り上げた感動を共有することにある。

なお、ワークショップは事前の申し込みを要する。また展示場では、入館者が自由に「ぬりえ」、「パズルあそび」などを楽しめるスペースも設けている。



2008年の北海道立北方民族博物館でのオオカミ飯づくり



「太陽を放つワタリガラス」カルビン・ハント、1978年制作

野道夫氏は、ワタリガラスの神話を追って、アラスカからシベリアに渡り撮影をはじめたところだった。特別展開連事業では、その星野氏が出演する「地球交響曲第三番」の上映会も予定している。

特別展で見ていただきたいのは、古くからの生活用具や現代の版画にあらわされた、動物や植物と人との関係である。「動物の人たち」の物語に耳を傾け、それが北に暮らす人びとのなかに今も受け継がれていることを、感じていただければ幸いである。



# 点字の宇宙 企画展「点天展」の趣旨

二〇〇九年が点字の考案者ルイ・ブライユの生誕二〇〇年であること知ったのは数年前のことだった。

最初は「ブライユってそんなに昔の人じゃないんだ」という思いしかなかった。しかし考えてみると、ブライユの生誕三〇〇年にはたぶん僕はこの世にいないのだから、生誕二〇〇年は点字関係の大きなイベントを企画する最初で最後のチャンスということになる。

中一のとときに失明し、三〇年近く点字を愛用する視覚障害者として、また博物館で働く研究者として、僕は「点字の展示」（以下「点展」）を実現すべく準備をはじめた。

## 「点字」視覚障害者用の「特殊な文字」なの

ブライユの生誕二〇〇年をきっかけに、僕は「点字」視覚障害者用の特殊な文字」という固定観念を打破することをめざしている。とはいえず、点字は地味である。見た目のインパ

## したたかな創造力としなやかな発想力を「点字力」と名づける

僕自身、そういったオーソドックスな点展の意義を否定しないし、民博の企画展でも点字の歴史や役割を一般来館者に紹介することを課題としている。

ただ、僕にとつて最初で最後のチャンスである。他の人にもできる点展ではおもしろくない。困ったときは原点に戻れというわけで、ブライユの伝記を読み返すことにした。ブライユは視覚障害者に読書の自由と喜びを与えた偉人として認識されてきた。伝記を通して彼の偉業を確認する一方、二一世紀の新たなブライユ像をどうアピールできるかを考えた。

点字はわずか六個の点の組み合わせで日本語の仮名はもちろん、数字アルファベット、音符も表すことができる。また、文字は線で表現するという暗眼者（多数派）の論理にこだわらず、触覚による読み書きに適した文字として提案されたのが点字である。ブライユのモットー、すなわち点字の特徴とは「少ない材料から多くを生み出すしたたかな創造力」「常識にとらわれないしなやかな発想力」の二点に整理できる。

トキのバードカービング(制作・内山春雄)



「マカオ・ブライユ生誕200年」を記念した切手。2009年発行



「フランス・ブライユ生誕200年」を記念した切手。2009年発行

ひろせ こうじろう  
廣瀬浩二郎  
民博 民族文化研究部

専攻は日本宗教史、障害者文化論。二〇〇九年五月、新著「さわる文化への招待―触覚でみる手学問のすすめ―」(世界思想社)を刊行した。現在開催中の企画展「点天展」の実行委員長。

クトは弱いし、一〇〇年前の貴重な点字本を陳列しても、一般来館者にはまったく読むことができない。民博での点展を具体化するために、まず僕は米国やフランスの先行事例を見学した。

今年は一〇〇年に一度のお祭りというところで、世界各地で点字関連の会議、巡回展がおこなわれている。記念切手を発行する国も多い。

たしかに欧米の点展は、地味な点字に興味をもってもらう工夫をあれこれしている。だが率直なところ、どの点展も大同小異で、斬新さはない。ブライユの生涯、点字が視覚障害者にもたらした恩恵、各国における点字の発展史。これらを古い点字本や点字器を使って解説するとすると、同じようなタッチにならざるをえない。

僕は点字に込められた創造力と発想力を「点字力」と名づけることにした。

現代文明の閉塞状況を打開するために必要なのが「点字力」なのではないか。ブライユは単なる点字の考案者でなく、二一世紀の人類に「点字力」の大切さを伝える存在として再評価すべきである。

ユニークな点展を求め試行錯誤していた僕は、「点字力」をキーワードとする展覧会計画を立てることにした。各来館者が「点字力」を共有し、その心の中で一点から壮大な宇宙(天)が広がることを願い、企画展タイトルを「点天展」に決めた。タイトルの前後に「…」を加え、点字の六点をイメージした。

## スローガンは「点字を触学、展示で触楽！」

さて、それではどうすれば来館者に「点字力」を体験してもらえるのか。僕が注目したのは、さわるアート作品である。「点字力」を活かした触覚芸術としてバード・カービング(木彫の鳥)、石創画(石粒を用いた絵画)、継手(木材を接合する伝統技法)アートを集めた。

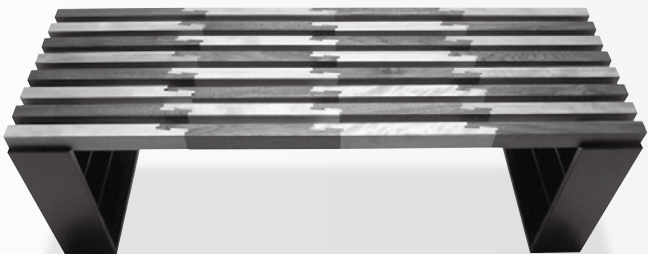
これらは木や石というシンプルな材料と少ない道具から生まれた職人

技、日本の手仕事の結晶である。手仕事の美とは見るだけでなく、さわることによって、より深く実感できるものだろう。今回の企画展では制作者の協力を得て、「アートにさわる」鑑賞法を提唱しているが、それは視覚優位の現代社会の常識に挑戦する試みでもある。

機会となればうれしい。最後にルイ・ブライユとともに点天展のスローガンを宣言しよう。点字を触学、展示で触楽！



高松塚古墳壁画の石創画(制作・江田拳寛)



32本のパーツを組み合わせた継手縁台(制作・M.Y. Yokoyama)





スペインのハムの博物館 Museo del Jamón

# ブタが支える 地域まるごとミュージアム

ドングリを餌に自然のなかで運動豊富に育てられるイベリコブタ。  
地域振興、エコツーリズムと連携しつつ訪れる人びとに食のありかたを提示する



ハム製作の工場も見学ルート。餌の種類で値段はまったく異なる



イベリコブタは牧場で育つが、冬場の夜間は畜舎で育てられる

アラセナにある「ハムの博物館」



イベリコブタはドングリを餌にして自然のなかで運動豊富に育てられる。その良質の生ハムは有名である。さっそくイベリア半島行きの調査計画をたて、イベリコブタ生産の中心地の一つであるスペインのアラセナに赴いた。そこには真正銘の「ハムの博物館」がある。

**食肉製品の生産、販売をとおして  
地域を観光開発する**

「ハムの博物館」といっても、スペインのマドリッドにあるレストランチェーン店のことではない。ブタの飼育は舎飼いというイメージが強いが、中国の農業指南書『齊民要術』や中世ヨーロッパの暦である『ペリー侯の豪華なる時禱書』からは、解放的な空間でこそブタはよく育つことがうかがえる。そこで、ブタの放し飼いがどのように行われているかを調べたいと思い、イベリコブタに狙いをつけた。

大規模農家と零細農家の二極化が著しいスペインにおいて、現在のEUやその前身となるECのなかで、在来農業を自立させるいくつかの政策がとられている。その一つが、比較的、輸出競争力の高い柑橘類や生ハム等については、農業者・加工業者・輸業者等から構成される団体を設立し、農産物の販売、輸出促進、技術開発等に取り組みことであった。

アラセナにも、「ウエルバ・ハム」(Jamón de Huelva)という団体が設立され、地域生産の食肉製品の認定が導入された。ここで、彼らは、

## 地域の自然と食文化の伝統を 明快に主張する展示

そんな背景のもとで、一九七〇年代に建てられ、市民ホールとして使われていた建物が二〇〇五年にハムの博物館として新たな役割を与えられたのであった。

現代の洗練された設備のもとで作られるハムではあるが、伝統の味や製法が守り続けられていることがうたわれる。アラセナの豊かな土地がイベリコブタを育ててきたことを明

のぼやしあつし  
**野林厚志**  
民博文化資源研究センター  
人と動物との関係について人類学の視点から調査・研究を行っている。



ハムの博物館という名のマドリッドのチェーンレストラン

農家による食肉製品の生産、販売だけでなく、地域そのものを観光開発しようという戦略をたてた。幸いなことに、周囲は自然公園が隣接する環境抜群の土地がら、ハム農家の町がエコツーリズムの隠れた拠点になるのはそれほど時間もかからなかったのである。

快に主張する展示からは、土地の人たちが育てている家畜や作っているハムをとっても大切にしていることを素直に感じることができた。

なによりも、この地にいると、レストランでの注文や料理の味わいが変わるのがある。自分の食べようとするものがよくわかってきている食事は、おもしろい。地域のブランド家畜に育ったイベリコブタは、地方の小さな村であったアラセナを多くの人びとが集う地域まるごとミュージアムに変えていったといえるだろう。

# 表紙モノ語り

## イヌイットの版画「夏のふくろう」

標本番号:H0115398

作者:ケノジュアク・アシエバク

国名:カナダ 1979年制作



きしがみのふひろ

岸上 伸啓

民博 先端人類科学研究部

極北地域ではホッキョクグマが百獣の王ならば、フクロウは英知を象徴する動物だ。フクロウは暗くみても活動できることに由来するらしい。イヌイットの版画家や彫刻家のなかにはこのフクロウを好んで描く人がある。ケノジュアク・アシエバクもその一人だ。彼女の版画はカナダ国内は言うにおよばず、世界各地で高い評価を受け、イヌイット版画を代表する作家のひとりである。

イヌイットの版画制作は、日本の浮世絵と切っても切れない関係にある。イヌイットに滑石彫刻や版画の制作を奨励し、世界に広めた人物は、カナダ人のジェームズ・ヒューストンである。彼はアート雑誌を見ているときに浮世絵に遭遇し、こ

れをイヌイット社会に導入できないかと考えた。そして一九五八年秋から一九五九年春にかけて来日し、当時の日本版画界の重鎮、平塚運一のもとに弟子入りして、版画制作を学んだ。彼は、原画を描く人、彫る人、刷る人が異なる分業体制のしくみや制作技法、画材となる和紙をケープ・ドーセットのイヌイットに紹介した。これがイヌイット版画の本格的な始まりとなり、以降、ブブンニトゥック、ホルマン、ペーカー・レイク、パンクネグトンなどの村々で版画が制作されるようになった。

版画も滑石彫刻と同じく、狩猟活動やキャンプ生活、家族、世界観、極北の動物など「イヌイットらしさ」を表象する作品が販売を目的として

制作されたが、その販売からの稼ぎがスノーモービルやガソリン、銃弾の購入などに使用され、狩猟・漁撈など伝統的な活動の継続に貢献した。さらに一九八〇年代にはアートとして欧米の美術界で認知された。

現在では、第三世代の版画家が出現し、あらたなテーマや技法で版画制作に挑戦している。





特別展

「自然のこえ 命のかたち」  
—カナダ先住民の生みだす美—

会期 九月一日(木)～二  
月八日(火)

会場 特別展示場

■関連ワークショップ

①「北西海岸先住民のオオカミ  
仮面づくり」

実施日 九月一日(日)

②「イヌイット文字のぼんぼり  
をつくろう」

実施日 九月四日(日)

時間 三時～五時三〇分

会場 第三セミナー室

定員 二〇名(申し込み先着順)

実費 三三〇円

参加申し込み方法

タイトル・実施日・参加人数・  
参加者氏名・年齢・郵便番号・

住所・電話またはFAX番号  
を書いて左記「ワークショップ  
(カナダ)係」までお申し込みく  
ださい。

なお、小学校三年生以下の方は  
保護者同伴でご参加ください。

E-mail: workshop@idc.  
minpak.ac.jp

FAX 〇六六八七八七五三三

企画展

「点字の考案者ルイ・ブ  
ライユ生誕二〇〇年記  
念…点字展…」

会期 八月三日(木)～二  
月四日(火)

会場 常設展示場内

■関連イベント

点字体験&展示資料解説

「さわる文化への招待

—点字を触学、展示で触衆—

実施日 九月二日(土)

時間 二時～六時

会場 企画展示場入口  
以上、三件のお問い合わせ  
情報企画課情報企画係  
電話 〇六六八七八八五三三  
(平日九時～一七時)

◆公開講演会  
「人・家畜・感染症—グ  
ローバル化時代の関係  
をさぐる」

実施日 一〇月九日(金)

時間 一八時三〇分～二一  
時一五分(開場一七時三〇分)

会場 日経ホール(東京 日  
経ビル三階)

定員 六〇〇名(申し込み先  
着順) 手話通訳あり

参加費 無料

参加申し込み方法

「公開講演会希望」と明記の上  
氏名・郵便番号・住所・電話番  
号・今後の講演会などの案内送  
付希望の有無を書いて、ハガキ、  
FAX、メールにて左記「研究協  
力係」までお申し込みください。

E-mail: koenkai@idc.  
minpak.ac.jp

FAX 〇六六八七八八四七九

お問い合わせ 研究協力課研  
究協力係

電話 〇六六八七八八二〇九  
(平日九時～一七時)

◆みんなく映画会/研究公演  
みんなくワールトシネマ  
「グラン・トリノ」

実施日 九月二六日(土)

時間 一三時三〇分～一六時  
三〇分(開場一三時)

会場 講堂(定員四五〇名)

参加費 無料(当日先着順・  
整理券配布)

研究公演①  
「伝統芸能パンソリによ  
る韓国文化の理解」

実施日 九月二七日(日)

時間 一三時三〇分～一六時  
三〇分(開場一三時)

会場 第五セミナー室

定員 九六名(当日先着順)

参加費 無料

お問い合わせ 財団法人千里  
文化財団

電話 〇六六八七八七七八九三  
(平日九時～一七時)

研究公演②  
「南シベリア・トゥバの  
喉歌 ホーメイ」

実施日 一〇月二日(日)

時間 一三時三〇分～一六時  
三〇分(開場一三時)

会場 講堂(定員四五〇名)

参加費 無料

参加申し込み方法

「公開講演会希望」と明記の上  
氏名・郵便番号・住所・電話番  
号・今後の講演会などの案内送  
付希望の有無を書いて、ハガキ、  
FAX、メールにて左記「研究協  
力係」までお申し込みください。

E-mail: koenkai@idc.  
minpak.ac.jp

FAX 〇六六八七八八四七九

お問い合わせ 研究協力課研  
究協力係

電話 〇六六八七八八二〇九  
(平日九時～一七時)

◆みんなく映画会/研究公演  
みんなくワールトシネマ  
「グラン・トリノ」

実施日 九月二六日(土)

◆モンゴルin博関連講演会

実施日 九月三日(火・祝)

時間 一四時～一五時三〇分

演題 「ナマケモノ」などの賢  
い?—モンゴル草原にまなぶ  
環境のつぎあい—

会場 第五セミナー室

定員 九六名(当日先着順)

参加費 無料

お問い合わせ 財団法人千里  
文化財団

電話 〇六六八七八七七八九三  
(平日九時～一七時)

中華街文化フェア 灯籠會

開港一五〇周年を迎える横  
浜の中華街で、一〇月二日  
(月・祝)まで開催の同イベ  
ントでは、民博の収蔵資料(ラ  
ンタン)のレプリカを展示し  
ています。

●無料観覧日のお知らせ

九月二日(月・祝) 敬老  
の日、常設展・特別展を無  
料で観覧いただけます。た  
だし、自然文化園を通行される  
場合は、入園料が必要です。

●休館日変更のお知らせ

九月三日(水・祝)は祝  
日のため開館し、翌四日(木)  
を休館します。

\*詳細及びお申し込みにつ  
いては、みんなくホームページ  
をご覧ください。

みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13:30~15:00 (13:00開場)  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要  
です。

第376回 九月19日(土)

【特別展関連】

「イヌイット・アートの世界  
—極北からのメッセージ」

講師 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授)

秋の特別展では、イヌイットの版画を  
展示します。イヌイットが制作した版  
画や彫刻品を事例としてイヌイット・  
アートの誕生から今日にいたるまで  
の歴史的展開についてお話しします。



イヌイットの版画「偉大なふくろう」  
Pitaloosie作1981年、カナダ・(旧)北西準  
州・ケープドールセット(国立民族学博物館蔵)

第377回 10月17日(土)

【総合研究大学院大学関連】  
(文化科学研究科開設20周年記念)

「極限の文化—人はどこで生き  
ているか 生きられるか—」

講師 廣川 和花(大阪大学総合学術博  
物館助教・大阪大学大学院助教)・  
池谷 和信・松山 利夫・近藤 雅樹(以上、  
民博教授・総合研究大学院大学教授)

飢餓、傷病、争乱…。人類は常にさまざま  
な極限状況に直面してきました。こ  
うした危機を克服するために獲得し、  
生活習慣となって受け継がれてきた  
ものが諸民族社会の文化です。食糧獲  
得加工の知識技術、呪術行為などの伝  
承や、それらの総体から創造された民  
族固有の神話・伝説に基づく世界像  
です。総合研究大学院大学文化科学研  
究科の開設20周年を記念して、文化  
誕生の秘密を探ります。

参加費 無料

申し込み締切り

①九月一日(木) 必着

②九月二日(木) 必着

以上、三件のお問い合わせ  
広報企画室企画連携係

電話 〇六六八七八八二二〇  
(平日九時～一七時)

友の会

東京講演会 9月13日(日)

海外所蔵のアイヌ民族資料  
—先住民博物館をめぐって

講師 小谷凱宣(名古屋大学名誉教授)

先住民をめぐる世界の動向をうけて、  
国立のアイヌ民族博物館設立が話題  
にのぼっています。しかし、国内の資  
料だけでは、アイヌ文化の時代差や  
地域差を具体的に展示することは難  
しいのです。そこには近代日本の先住  
民政策や研究史などがからんでいま  
す。国立アメリカ・インディアン博  
物館を例にあげて考えます。

時間 14:00~15:30(13:30開場)

会場 JICA地球ひろば  
セミナールーム202

定員 40名(当日先着順、会員証を  
ご提示ください)

東京講演会 9月26日(土)

特別展「自然のこえ 命のかたち」関連  
カナダ先住民のいま—イヌイット  
と北西海岸先住民の世界

講師 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授)

時間 14:00~15:30(13:30開場)

会場 JICA地球ひろば  
セミナールーム302

定員 60名(当日先着順、会員証を  
ご提示ください)

友の会講演会 10月3日(土)

特別展「自然のこえ 命のかたち」関連  
カナダ先住民のこれまでとこれから  
—生業と文化の権利を中心に

講師 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授)

カナダ先住民とは、ファースト・ネー  
ションズ(インディアン)とメイティ、  
イヌイットです。彼らの歴史から現在  
の生活について、生業や文化の権利、  
先住民運動、国家との関係に着目し  
ながら紹介します。

時間 14:00~15:00(13:30開場)

会場 国立民族学博物館  
第5セミナー室

定員 96名(当日先着順、会員証を  
ご提示ください)

講演会終了後、特別展見学会を行  
います。(特別展観覧料が必要です。)

定員 30名(当日先着順。講演会受付  
にてお申し込みください。)

国立民族学博物館 友の会

電話 06-6877-8893

ファックス 06-6878-3716

電話でのお問い合わせは  
月曜～金曜日9時から17時まで  
にお願いします。

http://www.senri-f.or.jp/  
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

CANADIAN SPIRIT

特別展「自然のこえ 命のかたち—  
カナダ先住民の生みだす美」会場出口  
ではミュージアム・ショップを特設  
し、先住民の持つ独特の色彩やデザ  
イ



トーテムポールのミニチュア(¥1,260~)、  
トート・バッグ(¥1,995)、ドリームキャ  
チャー(¥3,360)

ンが表現された関連グッズを集め紹  
介しています。トーテムポールのミ  
ニチュア、伝統的な絵柄を北西海岸の  
アーティストがモダンにアレンジし  
たトート・バッグ、神話から生まれた  
幸せを呼ぶドリームキャッチャーな  
ど。カナダ先住民の美を特別展ショ  
ップでもみつけてください。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112

ファックス 06-6876-0875

水曜日定休  
ウェブサイトもご覧ください。  
オンラインショップ「World Wide Bazaar」  
http://www.senri-f.or.jp/shop/  
E-mail shop@senri-f.or.jp



# 「神の御心のままに」

イスラム教を国教と定めているパキスタンでは、「イン・シャー・アッラー」という言葉をよく使う。アラビア語で、文字どおりには「もし神がお望みなら」という意味で、「神の御心のままに」と訳される。

最初はこの言葉にずいぶん戸惑ったことが多かった。たとえば、官庁に出向いて事務手続をおこなない「午後には証明書をいただけますよね」と念を押すと、「イン・シャー・アッラー」と返ってくる。航空会社のカウンターでも「明日の飛行機は大丈夫ですね」「イン・シャー・アッラー」。

滞在先の人びとに「来年も必ず来ます」と言うのと、これも笑顔で「イン・シャー・アッラー」と返答される。

●希望的で肯定的な祈りの言葉

こちらの感覚では「はい、確かに」とか「大丈夫です」「待っています」という答えを期待するので、慣れるまでは何だか頼りない感じがした。

しかし、決して悲観的な意味ではなく、むしろ希望

的で肯定的な意味あいが強いです。「そうなる」といいですね」とか「神様の御心のままに、無事にその日

を迎え約束事が果たせますように」という祈りの言葉なのである。もし、予想外の結果になったとしても、すべて「神の御心のまま」と誰を恨むこともない。

よく考えると日本にも「一寸先は闇」という諺ことわざもあるとおり、未来の事象にかんしては、たとえ一秒たりとも確約されたものではなく、神のみぞ知る世界である。ふだんは手帳に一年後の予定までぎっしり書き込んで、疑問すら感じなかったが、こう考えると「神の御心のままに」というのは、真実、理にかなった言葉だと納得した。

●人間の力の限界を痛感する

私の研究調査地であるパキスタン北部バルティスタン地方は、世界第二の高峰K2（八六二一メートル）や美しい姿のマツシャーブルム（七八二一メートル）など、八〇〇メートル級（七の山々が連なるカラコルム



フーシェ村から名峰マツシャーブルム(7,821m)を望む

山脈の麓に位置する。

人びとの生活は半農半牧で、急な斜面を耕し小麦や蕎麦や豆類などを作るが、

人口に対する耕地面積は絶対量が不足し、自給自足も難しい。しかも、冬季の寒さは想像以上で、戸外活動は極端に制限される。人びとはカッターとよばれる冬部屋に籠もって春を待つ。

こうした厳しい生活環境のなかでは、何事につけても人間の力の限界を痛感することが多い。日々の暮らしのなかで、人びとが強い信仰心をもち敬虔に祈る姿に、同じ人間として素朴な感動を覚えた。慣れてくると「イン・シャー・アッラー」は、自然と口に出るようになった。

春が近づき、庭に小さな草の芽が出ただけで、人びとはとたんに笑顔になる。「緑が出たね」、「ほんとう、緑が出たね」と挨拶をする。道行く人びとも「来週には、畑仕事をはじめようか?」、「お天気がよいといいね」、「イン・シャー・アッラー」などと会話が弾む。



「鎌立て」早春の良き日を選び供物を供えて、畑仕事を始める(サリーン村にて)



おかだちとせ  
岡田千歳  
松山大学非常勤講師  
音楽教育、民族音楽が専門。カラコルム登山の経験を機に一九九四年からバルティスタン地方の民族音楽を調査。この一〇年は叙事詩「ケサル物語」の調査研究に携わっている。





# 都会の選挙と田舎の選挙 変容するケニアの遊牧民集落

二〇〇七年二月二十七日におこなわれたケニアの総選挙では、選挙後に発生した暴動により、多数の死者や国内避難民を出す事態となった。

今回の総選挙では、大統領選候補者の民族的な帰属が政治的争点になっていた。選挙直前の首都・ナイロビは、連日の大小の政治集会、デモ行進、街宣カーなどで騒然としていた。

## ●差入れに励む候補者たち

一月二十日、わたしはナイロビ市の選挙運動から逃げるように、ケニア北部の乾燥地で生活する遊牧民アリアールの集落での調査を再開した。この集落は、ガソリンが入手可能な町から一〇〇キロメートル以上離れた遠隔地に位置しており、人びとはラクダとウシの乳に依存した生活を営んでいる。

集落に着いた夜のことだ。搾乳を終えた家畜のため息が聞こえる暗闇のなか、人びとと再会を喜び合っていると、風に乗って場違いなポップ音楽が聞こえてくる。

「ここに車で来る人間なんて私ぐらいのはずだが？」と思いながら、音のする方向を見ると、遠くに車の灯火が光っていた。しばらくすると賑やかな音楽を大音量で流すトラック

が到着した。大統領選と同時にこなわれる、この地域の国会議員選の候補者が、乾期の水不足に悩む遊牧民に水を差し入れにきたのだ。

水ために注がれる水、灯火の輝き、音楽、タバコやビールの差し入れ、「お祭り」のような盛り上がりは深夜まで続いた。しかしトラックが去った後、集落の人びとは醒めたように、「これっぽっちの水が何になるって言うんだ!？」と言いながら、早々に眠りについていた。

このような砂漠の街宣カーは昼夜を問わず遊牧民の集落をまわり、ナイロビ市さながらの選挙運動をおこなっていた。それは、田舎町のガソリンを使い尽くすほどだった。選挙運動員は人びとの歓心を買うべく、水や食料、お金などの「差入れ」を提供していた。

## ●国家の外側から内側へ

つい最近まで、この地域の人びとは選挙に関心をもっていなかった。そのため「差入れ」の量で選挙の趨勢が決まるようなところがあったという。なぜなら、選挙人登録すらされていない人びとが多かったし、たとえ投票しても、選ばれた国会議員や大統領が地域のために何かしてく

れることは、選挙時の「差入れ」を除けば無かったからである。言い換えればケニア北部の遊牧民は「国家の外側」に位置づけられてきた。

しかし近年のケニアでは、こうした「国家の外側」に対しても、地域の国会議員を介して、インフラや行政サービスが提供されるようになってきた。たとえば集落付近では、地域住民が国会議員に陳情することで、年中涸れない深井戸が掘削されたり、学校や診療所などが建設されたりしている。

こうした変化を目の当たりにした人びとは「誰が『私たちの声』を聞いてくれるのか」といった観点から投票をおこなうようになってきている。もはや選挙は「お祭り」ではない。政治に参加し、国家と交渉しながら自分たちの生活を守り、変えていくための手段なのである。



国会議員選挙の運動員による集落の貯水槽への給水(2007年)



原野に設置された投票所で投票する女性たち(2002年)



ないとう なおき  
内藤 直樹  
民博 機関研究員  
専門は生態人類学、地域研究。東アフリカ牧畜社会の制度・組織の可変性・流動性、貧困と開発、紛争・難民問題などに関心がある。著書に『遊牧民』(昭和堂、二〇〇三年)などがある。



多文化を	ささえ	人びと
ささえ	える	
人びと		

# 外国人の「居場所」をつくる

## 財団法人とよなか国際交流協会

豊中市の外郭団体として一九九三年に設立されて以来、外国人コミュニティが安心して集える「場づくり」を行なう「財団法人とよなか国際交流協会」。外国にルーツのある人たちの「居場所・拠り所」を用意するとともに、エンパワメントを目指すさまざまな事業を展開する

阪急宝塚線の豊中駅から徒歩約一〇分、国道一七六号線沿いから若干奥まった閑静な住宅街に位置する三階の建物「とよなか国際交流センター」の二階に、財団法人とよなか国際交流協会は事務所を構えている。

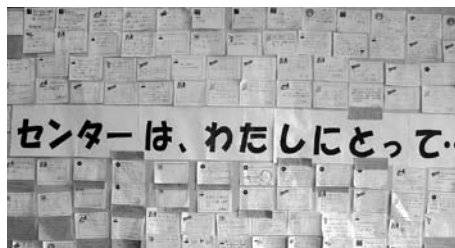
### 外国人ママと子どもたちの心地よい空間

私は一〇年ほど前からこの活動に関心をいだき、定期的に訪れているが、ここに向かうたびに我が家への帰路に着くような感覚をいただく。同じように感じる人も多いようで、建物の入口付近の「センターはわたしにとって……」という寄せ書きスペースにはさまざまなことばで、「僕の生活の一部です」、「私の家のようなところです」など、ここに集う外国人や日本人の率直な気持ちが続られている。

二階のオープン・カウンター式の



協会事務所は国際交流センターの2階部分



外国人や日本人の想いを込めた寄せ書き

る彼らにとって心地よい空間となっているようすが感じられる。

協会が展開する三大事業である「相談サービス」、「日本語」、「子どもサポート」は、「女性と子ども」を対象に実施されている。市の財政悪化や協会予算の逼迫等といった近年の状況から事業のターゲットを絞り込んだ結果ではあるが、異国の地でもっともストレスにさらされ、弱い立場に置かれている両者に焦点を当てている点に特に注目している。

レスを共有する女性たちにとって、息抜きと交流ができる憩いの場にもなっている。社会のなかで居場所を確立できない外国人女性にとって、オアシスのような存在といえるかもしれない。

相談事業もまた、当初の四言語から九言語対応になり、生活相談だけでなく、家庭内暴力（DV）の相談の増加に伴ってDV専用ホットラインを設けるなどして、充実してきたとくにDV相談では、支援する機関が全国的にも少ないことから、「DVの相談ならとよなかへ」と言われるまでになったことは大きい。

### 母語・母文化継承をサポートする「子ども母語」活動

協会に通う子どもたちは、来日した子どもだけでなく、日本生まれ、日本育ちの外国籍やダブルの子どもの数も増え、大きく多様化している。私が協会の活動でもっとも注目している「子どもサポート」事業の対象は、そういう子どもたちである。ことばや文化が家庭から失われることを危惧する保護者の呼びかけで、母語・母文化継承をサポートする「子ども母語」活動が開始され、現在はポルトガル語・スペイン語・中国語のクラスが展開されている。

言語学習がメインではなく、子どもたちがそこで母語・母文化に触れ



交流スペースで日本語を学ぶ外国人とボランティア

自分のルーツを肯定して価値を見出し、仲間と寄り添える場所を提供する活動になっている。また、日本語学習が負担になっている子どもたちをサポートする「サンブレイス」は、大学生・大学院生のボランティアが日本語と学習を支援し、両者が寄り添って成長できる場を提供している。

母語・学習支援事業は一般に多数あるが、このサポート事業のユニークな点は、子どもたちと同じルーツをもち、同じ経験をし、年齢も近い「ピアサポーター」が、同じ目線で寄り添いながら活動を引っ張っていることだ。

「子ども母語」のスペイン語担当は

大学院生、中国語担当は大学生、アシスタントたちは高校生、また「サンブレイス」でも中国などにルーツがある大学生たちが「ピアサポーター」を務め、子どもたちのロールモデルになっている。この活動で成長した子どもたちが将来、新たな子どもたちのロールモデルになる姿が目に見えようである。

### 直面する課題と期待、そして協会の今後

外国人のエンパワメントを目指し、積極的に事業を展開してきた協会だが、現在大きな課題に直面している。来年、活動拠点が豊中駅に隣接する商業施設内に移転するのだ。アクセスが便利になり、より多くの人が集えるようになるが、親しん



「子ども母語」活動の子どもたちとボランティア

野中モニカ  
M.C.O.O.D.J., 京都外国語大学・天理大学・甲南女子大学非常勤講師  
専門は日ブラジル人研究（言語・教育・アイデンティティ）、ポルトガル語教育。近年は、継承語としてのポルトガル語教育・教材開発に関心をもちている。共著に『ポルトガル語の会話エッセンス』（二〇〇七年）がある。

### 外国人女性にとっては、オアシスのような存在

協会が実施する事業に外国人の声を取り上げられるようになったのは、一九九八年の多言語スタッフによる相談サービスの開始からである。外国人に寄り添う方向へと協会がシフトしたのは、多言語スタッフの存在が大きい。スタッフたちは単なる通訳ではなく、同郷の、とくに女性たちの相談に乗り、寄り添い、その声を協会にフィードバックしてきた。

結果として、母子保健事業、外国人ママ・親子の交流事業、幼い子ども連れの母親でも積極的に参加できる保育付き日本語事業など、需要に即したさまざまな事業が生まれ、発展してきたのである。

保育付きの日本語クラスは、日本語を学ぶ場だけでなく、異国での出産や子育てからくるさまざまなスト



相談を受け持つポルトガル語、ベトナム語、スペイン語の多言語スタッフたち

できた施設の移転の反対運動が収まらなかったことで、「当事者である自分たちの声が無視された」と落胆する外国人コミュニティがある。

さらに、移転の一年後には、現在のとよなか国際交流センター指定管理者である協会の当初の管理期間が終了する。継続できなければさまざまな事業の存続が危ぶまれる。

外国人市民の居場所づくりを長年かけて行なってきた協会だが、今後とも地域の外国人にとっての「拠り所」であり続けることができるのだろうか。地域住民として、外国出身者として、女性として、協会の今後を期待し、注目していきたいと思う。



# 世界を動かした熱帯の植物 (コショウ)

西欧は胡椒への欲望から、大航海時代にアジアを目指した。かつて世界を変える原動力であった胡椒は、世界中に普及したいまも、かつてとは違わなかに世界を動かしている



ランブン州の人たちは10メートル近く伸びる木からコショウの実を収穫する



コショウの実と葉。葉脈のつき方に特徴がある

紀元前より世界の食文化を彩る胡椒は、いまや塩とともにごくありふれた調味料であるが、かつては、時に同重量の金と交換されるほどのぜいたく品であった。大航海時代までのヨーロッパでは、ヴェネチアを通じて輸入されるかぎられた量の胡椒しか流通しなかつたためである。

## 胡椒とともに歩んだ歴史と今

他方で、中国の唐・宋時代のせいとく大きな食文化のなかでうまれた胡椒の大きな需要にこたえるかたちで、東南アジア島嶼地域の港市は栄え、ジャワ島やスマトラ島でのコショウ栽培がすすんだといわれる。

このような流通の地域間格差をもつていた胡椒への欲望が、一五世紀末から一七世紀半ばの大航海時代に、西欧諸国をアジア進出に駆り立てた。インドやインドネシアなどの生産地は西欧諸国の植民地となつたことで胡椒は安価に取引されるようになり、商品としての希少性を失つた。それは胡椒が、世界各地における庶民の食生活に欠かせない日常的な香辛料へと変化する過程でもあつた。

現代の世界で流通する胡椒は、伝統的な黒・白あるいは粒・粉の胡椒



コショウの苗の植え付け

右・実は未熟なうちに収穫する  
左・実はそのまま天日乾燥すると黒胡椒になる

だけではない。凍結乾燥技術による赤や緑のカラフルな胡椒や、ペーパーオイルのような二次製品など多様な製品が登場し、薬品やブランド香水の原材料、加工食品の添加物としても流通している。

現代の胡椒の主要生産国は、ブラジル、インド、インドネシア、マレーシア、スリランカ、マダガスカル、そして、近年生産量を増大させているベトナムと中国である。

## 黒胡椒と白胡椒の両手間違う

胡椒が、いったいどんな植物でどのように生産されているのかについては、あまり知られていない。インドネシア共和国の例を中心にみていこう。

インドネシアでは、マラッカ海峡周辺に位置するパンカ島が白胡椒生産で知られる。白胡椒は黒胡椒と同一品種から加工されるが、白胡椒に用いられるコショウは、黒胡椒に用いられるコショウとは栽培環境に違いが見られる。

白胡椒生産には、収穫した実を水に浸して外皮を取り除く工程が加わるため、天日乾燥のみの黒胡椒よりも手間がかかる。これによって白胡椒は、黒胡椒よりも上品な刺激になり、市場価格も黒胡椒より高い。白胡椒のためのコショウは大農園で単

## 焼畑とも深く関わっていた栽培法

他方で、スマトラ島南端に位置するランブン州は、オランダが植民地支配する以前から独立以後、現代に至るまで、黒胡椒の世界的な生産地域である。

同州一帯における伝統的なコショウの栽培方法は、焼畑陸稲耕作と密接に関係していた。熱帯多雨林を焼き、焼畑をつくり、一定の期間陸稲を耕作した後、コショウを植えていたのである。コショウの蔓の添え木として、特定種の樹木を等間隔で植えてきた。施肥はせず、森林が養った地力に依存する粗放的な農法で、十数年間収穫を続ける。

収穫された未熟な緑の胡椒は、天日乾燥されることで黒胡椒になる。現代のランブン州では、コーヒーなど他の換金作物と胡椒を混作することが一般的である。混作するほうが病害にかかりづらく生育が良いという説明を聞いたことがあるが、乱高下する市場価格に対して作物を多様化することでリスクを回避する目的もあるだろう。

## 世界経済のただなかで変わるコショウ栽培

ランブン州におけるコショウの栽培を巡る環境は大きく変化している。同州南部ではいまやキャッサバ、トウモロコシ、水稲などが中心な栽培植物である。国内移民による農地開拓によって、南部では栽培可能な土地が減り、栽培してもさまざまな病気にかかりやすく十分な収穫・収入が見込めないからだといわれる。

コショウ栽培の中心は、開発が進んでいないために森林が比較的残っている地域に移っている。国際市場における供給過剰と価格下落もまた、少量では利益が薄く転作を余儀なくされる状況を生み出している。

刺激を求めて当然のように胡椒をもちいる私たちの食は、国内外の社会・経済環境や、開発による自然環境の変化に大きく揺さぶられる熱帯の胡椒生産者たちによって支えられている。



コショウ *piper nigrum* (ピペル・ニグルム)

胡椒は、コショウ目コショウ科コショウ属に分類される蔓性の多年生植物。熱帯地域に植生し、年間降水量2000~3000ミリの多雨と同時に水はけのよい土壌も必要とする。蔓は樹木や添え木にまきつきながら7~10メートルほどに伸びる。実は房状につき、熟すと赤色になる。植物としての寿命は、通常は10数年、長ければ30年にも至る。原産地はインドのケーララ州という説が有力。

※写真はいずれも、Vivit Bertoven Nurdin 氏提供

かねこ まさのり  
金子 正徳  
京都文教大学教務補佐(教育GP担当)、  
民博 外来研究員  
インドネシア共和国ランブン州を主たる調査地として、慣習・生活世界そして文化の変容を研究してきた。現在は、モノとコトの消費に関心をもちながら研究を進めている。



# 歳時 世相篇 18

九月二日。この日は、ホーおじさん、ことホーチミンのベトナムと深い縁がある。ざっと六〇年あまり、さかのぼってみよう。

## 独立と戦いの日々の中

一九四五年三月の「仏印処理」で日本軍は仏印軍を武装解除した。それも東の間、八月一五日には、ご存じのとおり日本は連合国に無条件降伏した。これを機に、ベトナム独立同盟（通称ベトミン）が八月革命を起し、各地で蜂起が相次ぐ。

まもなくベトミン指導者ホーチミンは、ハノイのバーディン広場で、ベトナム民主共和国の独立を宣言する。九月二日のことである。だからこの日が現在でも国慶節として、国民の祝日である。

しかしベトナムは、すぐにフランス、アメリカをはじめとする大国を割れたフィルムでリビートされる、抑圧と貧困という薄暗い昔語りにもうウンザリしている。ファシスト日本だの、植民者フランスだの、賊アメリカだのと、日がな一日、枕詞つきの悪罵をテレビで聞かされる外国人も、やはり飽きて外に出る。

当然ながらハノイ市内は、日頃よりひどいバイクの洪水と喧噪である。繁華街では、あちこちに戸外ステージを設けて、歌謡ショーをおこなっている。どうせただ徘徊しているだけのバイク族。一度はそこで停止して、野次馬になってみる。渋滞はいつそうひどくなる。しかも、もともと後ろがつつかえていることを気にするような人たちではない。それを無理にどかさうとクラクションを鳴らすから、ますます喧しい。

街角に厳肅な雰囲気などなく、一日中、お祭りの狂騒である。宵になると、バイクで暴走行為を繰り返す若者も出沒するので、ぶつけられてはたいへんだ。ふつうの日でも、接触事故など日常茶飯事なのだから。

そんなわけで、国慶節の前は、ハノイを離れて旅行に出る家族も増えてきた。それだけの経済的余裕も出てきたのである。

## まもなく農繁期

ラオス国境に近い西北地方には、

## ホーおじさんの九月二日 ベトナムの国慶節

国慶節の9月2日、マスコミはプロパガンダを繰り返し、町じゅうがお祭り騒ぎの喧噪に包まれる。そういう都市部とは別に、それぞれにお祭りを楽しむ少数民族がいる。タイ、ラオス、雲南省などにも居住する黒タイは、ベトナム北部では70万を越える人たちが暮らす。中国でミャオとよばれるモンは、タイ、ミャンマー、ラオスなどにも暮らし、それぞれの伝統にのっとりつつこの日を祝う



かしながまさお  
檜永真佐夫  
民俗民族社会研究部

ベトナム西北地方の黒タイ村落を主なフィールドとして、伝統文化の継承を研究している。

## 豊かになったハノイ

九月二日、テレビをつけてみる。国内のどのチャンネルも、ベトナム諸民族がいかに団結しあつて、苦しさを堪え忍び、独立を勝ち取ったか、朝から晩まで、人民の勝利を一心に称えている。戦勝を記憶している者には、苦難の末の栄光を繰り返す追体験し、現在の幸福をかみしめる、たまさかの機会かもしれない。

しかし、三〇歳以下の戦争を知らない世代は、白黒で質が悪く、音も

巻き込んだ長い戦争に突入する。ベトナム戦争まったただ中の一九六九年、ホーチミン国家主席は、南北統一を見果てぬまま、死去してしまう。命日は、奇しくも九月二日。その六年後の四月三〇日、南ベトナムの首都サイゴンが陥落して、ようやくベトナム戦争は集結した。遺言で、「遺灰を北部、中部、南部に分けて埋めてほしい」と、ホーチミン

ンは希望した。しかし、二大共産主義国ソ連のレーニン、中国の毛沢東と同様、遺体は防腐処理されて、永久保存されることになった。バーディン広場前にホーチミン廟が建てられ、そこに安置された。これまた九月二日。ホーチミンは、この日に国を生み、この日に自身が死に、この日に骨肉が永遠の生を得た。



着飾って山から町に出てきたモンの人たち

くる時期。盆地を灌漑して水田を作っている黒タイの村人たちにとっては、米の収穫がまもない。まもなく農繁期に入るのだ。

ある若者は、「前日まで雨がふったり、曇ったりしていても、国慶節の日だけは決まって晴れる」と語った。実際、筆者は、その前日まで空の低いところまで垂れこめていた、厚い濁った雲が、この日にわかた追われて駆け出し、天照らす光が天下を占めるのを、神々しい感動をもって眺めたことがある。

そんな昼下がり、村の少年少女たちは、自転車に乗って市場を目指した。筆者も増水した川を歩いて渡り、苦勞して市場に行ってみた。せつかくのおめかしを、ぬかるみの泥で台無しにした若者たちが、ものを買うお金もなく、往來を眺め、友人たちと話し、じゃれ合っていた。家事もあるので夕飯時には家路につかなければなら

ない。それだけだ。しかし、それだけの思い出作りが、若者には非日常的なのだ。

## 歌垣を楽しむモンの男女

市場の近くには、色鮮やかな伝統衣装で着飾ったモンの若者も、男女ごとにかくくグループを作っている。モンは、山頂近くに村を作っている。中には、二〇キロも離れた山奥から歩いておりてきている者もいると聞く。現地のインフラ状況からすれば、いかにもありそうなことである。

彼らは、黒タイの若者たちとは、気合いの入りが違う。夜になると、男女が歌のかけ合い、恋のかけひきを繰り返すことになるからである。万葉集で知られる、歌垣に通底する習慣だろうと思われる。

モンは、北部でもっとも同化がうまく進まず、ホーチミンだの、独立だのに、一番縁遠そうな人びとである。かれらがなぜ国慶節の日に、こういう伝統的な行事をおこなうようになったのか、その経緯は詳しく知らない。

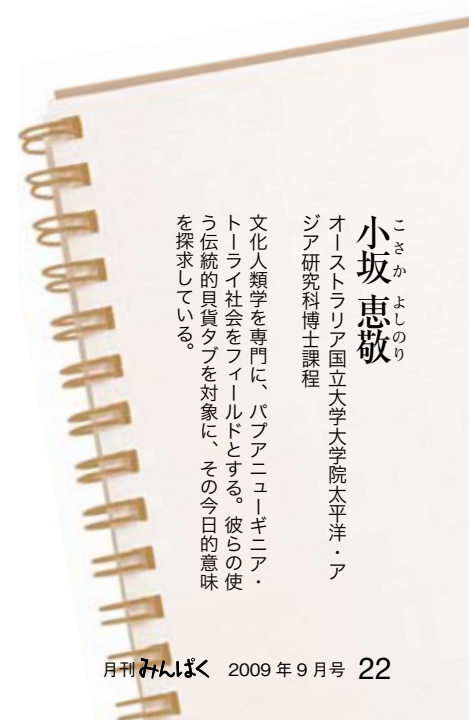
でも、次のことだけは明らかだ。国が生まれ、国父が死んだこの日が、非日常性を演出するための国民の祝日として、人びとのあいだに、もうすっかり根付いていることだ。



# プタ

パプアニューギニアの呪術とモノが宿す力

州都ココボを中心にココナッツのプランテーションが広がり、ココアが栽培される東ニューブリテン州。ここに暮らすトーライの人たちは、身につけていた衣類や髪の毛、足跡などをプタとよんで人手に渡らないよう努める。プタは、精霊が誤りのない神秘的力を発揮するうえで欠かせないからだ



こさか よしのり  
小坂 惠敬

オーストラリア国立大学大学院太平洋・アジア研究科博士課程

文化人類学を専門に、パプアニューギニア・トーライ社会をフィールドとする。彼らの使う伝統的貝貨タブを対象に、その今日的意味を探求している。

「これは内緒だから……」とマラーナ嬢は声を潜めて話しはじめる。それを聞く僕はパプアニューギニア東ニューブリテン州のラマルマル村にいる。僕の目的はそこに住むトーライの人びとについて、主に彼らの使う貝貨タブについて調べることだ。

しかし、僕だけかもしれないが、文化人類学者というのは、たとえそれが単なる噂話、半信半疑の話であり、かつ自分の調査主題と関係がなさそうに思っても、現地の人との秘密の開示には弱い。他に人がいないか周りを見渡してから耳をそばだてる。

惚れたつもりが、じつは惚れさせられていた

マラーナ嬢の話は、僕の友人でドイツからふらりとラマルマル村にやって来たマティアス氏に関するものだった。ドイツ人マティアス氏はラマルマル村でも美人のパライデ嬢



ココボのマーケット

を彼女にして、彼女の父から家を借りて一緒に暮らしていた。マティアス氏が言うには、いつも彼が女性を「選ぶ」立場なのだとか。そんなマティアス氏だが、マラー

ナ嬢の秘密情報によると、マティアス氏とパライデ嬢の二人の関係は、マティアス氏がパライデ嬢を選んだからではないのだという。真実は、パライデ嬢がマティアス氏の「プタ」を掠め取ったから、マティアス氏がパライデ嬢に「惚れている」らしい。ではその「プタ」とは何だろう。

下着泥棒のほんとうの目的

「プタ」とはある一群のモノを包括するカテゴリーである。それは髪の毛、唾液、汗、涙、経血、精液、そして各種の排泄物等々で、それらが身体から離れると「プタ」となる。さらには、「プタ」に触れ「プタ」を吸収したモノまでもが「プタ」となる。

トーライの人びとにとって、自分の食べ残しは、自分の唾液が付着したから「プタ」となる。また、一度でも身につけた服や下着は、自分の



汗を吸ったが故に「プタ」だ。彼らに言わせると、いくら強力な洗剤で洗っても駄目らしい。さらには足跡までもが「プタ」だと言う。こうして「プタ」とは、かつて自

分を構成していたが自分から切断されたモノ、つまり自己と非自己の境界物なのである。

トーライの人びとは自分の「プタ」が他人の手に渡らないよう、常に心がけている。たとえば、年頃のトーライ娘は母親から、自分の下着を外に干したまま家を空けないようにしつこく教えられる。トーライの中にも下着泥棒がいるということだ。

この話を聞いたとき、僕はトーライにも日本のように下着で興奮する輩がいるのかと思つたのだが、自分が持っている「常識」で彼らの話をそのまま理解してはいけない。改めて村人に尋ねると僕の早合点だとわかる。トーライの人びとは、性的嗜好からではなく、その下着が「プタ」だから盗むのである。

では、何ゆえにトーライの人びとは自分の「プタ」が盗まれないよう用心したり、逆に他人の「プタ」を盗もうとするのか。それはトーライの呪術において「プタ」が必要だからである。

呪術は社会と文化のありようを示す鏡

トーライの呪術では精霊が中心的役割を果たす。どんな呪術があるのか、僕は自分の「親戚」にあたるトピタ兄さんに頼んで、彼の「呪術ノート」を見せてもらった。



伝統的舞踏団への謝礼として貝貨タブが分配される



呪術師による幼児の水浴

そこに書かれていたのは、たとえば「ライバルの儀礼の日に雨を降らせて邪魔をする」、「自分たちの儀礼のために天気をよくする」、「喧嘩相手に謝らせる」、「警察から自分の姿を見えなくする」、「泥棒の犯人を捜す」、「好きな女の子を自分に惚れさせる」などを目的とする呪術の呪文と方法であった。これらは、トピタ兄さん曰く、すべて精霊の力を借りておこなわれる。

余談だが、人びとの呪術観念を調べることは単なる物珍しさからだけではない。呪術の内容は日常の社会

自己と非自己の境界にあるプタ

それはさておき、話を「プタ」に戻そう。トーライの呪術では天気はともかく、対人関係に関わる呪術では相手特定しなくてはならない。

先述のトピタ兄さんによれば、「だから呪文のなかで相手の名前を連呼する」のだ。しかし、もし同じ

名前の人物が二人以上いたらややこしい。恋愛呪術で、精霊が同じ名前の違った相手を自分に惚れさせてもしたらいへんである。そこで、自己でありながら他者の利用が可能な「プタ」が使用される。「プタ」はどれも元々相手の身体を構成していたものだから、これほど確実に相手を特定できるモノは他にない。

こうして精霊は「プタ」によって呪術者、あるいはその依頼者の願望をかなえるべく神秘的力を発揮するのである。

自分にとってはもはや塵芥のような抜け落ちた髪の毛や唾液が、トーライにとってはいまだ自己である。いや我々の社会でも、「プタ」はDNA鑑定などで使用されるのだから、トーライだけが特別な観念を持っているわけではない。自己と非自己の境界は何かしらと人類学的に考えつつ、どうしてトーライ娘たちは誰も僕の「プタ」を盗んでくれなかったのかと我が身について、フィールドで考えるのである。



## 編集後記

今月から特別展『自然のこえ 命のかたち—カナダ先住民の生みだす美』が始まる。大自然にはぐくまれたカナダの先住諸民族の造形芸術には一種独特の楽しさとユーモアがある。昨年8月号では、北西海岸の先住民のシルクスクリーンが表紙を飾ったが、そこに描かれていたのは「蚊」だった。「表紙モノ語り」(p.11)によれば、この地方の社会では蚊は害虫であるとともに、図案化されて特定の家族の紋章にされたという。その図案は儀式の時につける仮面にも使われ、人びとと祖先や自然とを結びつける働きをする。しかし、その姿は実にユーモラスである。目は穏やかにほほえみ、歯が描かれた口元も心なしか笑っている。夜中に耳元で羽音を響かせながら飛び歩いて安眠を妨げる厄介者だが、このような姿で描かれると憎めない。

カナダの先住諸民族の歴史は決して穏やかなものではなかったが、その動植物に対するまなざしは暖かく、ユーモアにあふれている。この特別展では、そのようなまなざしから生まれた彼らの芸術作品をじっくりと堪能していただきたい。(佐々木史郎)

### 次号の予告

みんなくインタビュー  
加藤九祚

## 月刊みんなく

2009年9月号

第33巻第9号通巻第384号 2009年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史

中牧弘允 信田敏宏 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 京都通信社

印刷 市蔵図書

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分(予定)。
- 特別展示場または常設展示場観覧料が必要です。
- \*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が、来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別! どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

9月の開催

9月6日(日)

話者: 廣瀬浩二郎

(民族文化研究部准教授)

話題: 点字の宇宙—なぜ『点展』

ではなく『点天展』なのか—

場所: 企画展「点字の考案者ルイ・ブライユ 生誕200年記念…点天展…」会場



ゴーギャン「タヒチの女」の点図 (提供・日本ライトハウス)

9月13日(日)

話者: 佐々木史郎(研究戦略センター教授)

話題: シヤマンとアニミズムの世界

場所: 中央・北アジア展示場内

9月20日(日)

話者: 岸上伸啓

(先端人類科学研究部教授)

話題: カナダ先住民のアート

場所: 特別展「自然のこえ 命のかたち—カナダ先住民の生みだす美」会場

9月27日(日)

話者: 小長谷有紀

(民族社会研究部教授)

話題: モンゴルの首相が語る、都会人たちの秘密

場所: 中央・北アジア展示



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

